

あいさつ

N・ラダクリシュナン
栗原淑江 訳

このたび、貴東洋哲学研究所がこのように意義ある日印合同シンポジウムを開催されましたことを、心よりお祝い申し上げます。今回のシンポジウムは、世界平和と非暴力を推進する今世紀の偉大な二人の人物——マハトマ・ガンジーと池田大作博士——を宣揚するシンポジウムです。この両者は、地球上での人間の生活は寛容、尊敬、共存を涵養しなければ持続させることはできないと主張しました。こうした教えは、偉大な釈尊、日蓮大聖人、そしてはるかに時代をくだったガンジーによつて提唱されたものです。

す。池田博士は、平和と幸福を推進され、生命の尊厳というメッセージをあらゆる地域に伝えておられるのです。

ここで、ディスカッションに入る前に、私のささやかな見解を述べたいと思います。今回、私は原稿を用意しませんでした。それは、皆様方のお顔を拝見しながら、直接、大事な問題を語りかけたかったからです。それは、「生命とは何か」、「私たちは何をなすべきか」という問題です。

ここで、私の脳裏に二人の人物が思い浮かびます。一人はもちろんガンジーであり、もう一人は池田博士です。私がガンジーの精神を学んだのは、ラマチャンドラン博士と私の父を介してでした。私は、二十八年間にわたりラマチャンドラン博士を師匠と仰ぎ、ラマチャンドラン博士が創立したガンジークラム・ルーラル大学で教鞭も執りました。その大学には、いつも新たな発見がありました。そこでは、若い男女が人道的、人間的に振舞うことを教えられていました。ラマチャンドラン博士は、教育は知識の蓄積にとどまるもので

東洋哲学研究所が、G・ラマチャンドラン博士の生誕百年を記念するシンポジウムの開催を企画されたことと自体、貴研究所と創価学会インタナショナル(SGI)が世界平和の推進に貢献していることを示す証しです。SGIが行っている平和への献身的活動、そしてSGIが周囲のあらゆることに對して関心と配慮をもっていることが、このシンポジウムを実現させたのです。

このたびインドから来日した一行五名を代表いたしまして、貴研究所とその偉大な創立者である池田博士に、心からの敬意の念を込めて頭をたれたいと思います。

はないと考え、「生活のための教育、生活による教育」を提唱したのです。

これは、牧口常三郎先生が提唱された教育と非常に類似したものです。この教育システムは、若い男女が真摯に人生をみつめながら、自らをエンパワーし、自己と社会を変革していくためのものです。変革をなそうとする人は、そして覚醒しようとする人は、不殺生、非暴力という理念に挑戦しなければなりません。かつて、釈尊は不殺生というメッセージを示しました。非暴力より高い徳はないのです。

ラマチャンドラン博士は、ノーベル賞受賞者であるラビンドラナート・タゴールの弟子でもあり、彼からも教育を受けました。池田博士もタゴールを敬愛されています。偉大なラマチャンドラン博士は、当時の最高峰といわれる二人の天才——タゴールとガンジー——に直接教育を受けたわけです。ラマチャンドラン博士は、若い時に詩的な面をタゴールによつて教育され、政治的・経済的・社会的な面はガンジーによつて教育されたのです。

そして、ラマチャンドラン博士は、生活に関するビジョン、教育に関するビジョンを提唱しました。机上の学問ではなく、生活のための教育、解放のための教育を提唱したのです。博士が南インドに創立した大学は、タゴールとガンジーから学んだ広範なビジョンを展開するセンターでした。現在でもなお、このセンターは、インドにおける最も偉大で最も献身的な、農村改革、女性教育のためのセンターでありつづけています。そこでは、ガンジーとタゴールの最高峰のビジョンが実現されているのです。

さて、現代の話に戻りましょう。ガンジーが抱いた社会変革のビジョンと、創価学会が示す社会変革のビジョンは、非常に類似しています。私は、研究者として、著述家として、また教師として、これら二つの世界的ビジョンを理解しようと努めてきました。創価学会は、十三世紀の宗教者、予見者である日蓮大聖人のビジョンにもとづいて活動を展開しています。日蓮大聖人は、宗教は他のものと切り離すことはできないと述べました。宗教は、人々が人間的に生きるためのま

ことに。ガンジーは、機械や科学技術には一定の役割があるけれども、人間は機械や科学技術の奴隷になつてはならず、それらの主人でありつづけなければならぬと指摘したのです。

では、どうしたら人間の精神性を顕在化させることができるのでしょうか。今こそ倫理、道徳性、人間への関心——すなわち新しい態度、新しいヒューマニズムが要請されているのです。これこそまさに、創価学会、なかんずく池田博士——私は敬愛の心を込めて「イケダセンセイ」と呼びます——が提唱されている点であります。

私は、著述家として、また研究者として、ガンジーが抱いたビジョン——社会変革のビジョン、教育のビジョン、変革を起こす存在としての人間のビジョン——と、創価学会の理念の類似性を指摘してまいりました。ガンジーのビジョンと創価学会のビジョンは、私にとって、二つの「解放する力」です。この力がもつ影響力は広範で、大きなものです。

ガンジーは不正に対して戦いを挑みました。それを

さに基盤であり、源泉なのです。

そして、教育は、私たちの生活を価値的なものにするためのものを提供しなければなりません。教育とは、研究をしたり、書物を著したり、学位をとったりするだけのものではないのです。研究も本も学位も、私たちにとって役立つものではありませんが、私たちはそれを超えていかなければなりません。それらを超えた価値があるのです。すなわち、私たちが相互に関係しあい、助けあひながら、共存できる世界です。これは、教科書や教育制度によっては教えられません。

私たちは、人間性を発揮し、互いに尊敬しあうことから始めなくてはなりません。人生においてもっとも美しいものは、「多様性」という現実です。しかし、残念なことに、現在のグローバル化され、機械化され、産業化された、科学技術優先の社会にあつては、それらが見失われてしまっています。

ガンジーは、一九〇四年に南アフリカで運動を始めるときに、すでにそれに気づいていました。機械にもとづいた文明は、人間性にとって非常に危険だとい

く、ラマチャンドラン博士も、不正に対して戦っています。たとえば彼は、シャンティニケタンのタゴールのもとで学んでいた学生であつたとき、学生に向けたスピーチの中で次のように述べたことがあります。「私はシャンティニケタンのすべてのものが気に入っています。しかし、私が理解できないのは、なぜ男性が女性よりすぐれていると考えるべきではないのかという点です」と。たとえば、一般に女性は愛国心で劣るという点です。私も男性なので、女性よりもすぐれているのでしょうか。しかし、私は、母親のもつ重要性が軽視されているのではないかと思います。

女性を尊敬することが、ガンジー哲学の基本理念でした。女性を平等に扱い、女性をエンパワーしたガンジーは、教育哲学、社会運動が女性にとって大事だと主張しています。ガンジーの言葉を借りれば、ある社会の質は、科学技術の進歩や物質的な進歩、高層ビルなどではなく、その社会において女性がどれだけ自由を享受しているかということによって図られるのです。このように、ガンジーは、旧来の伝統から女性を解放しよ

うとしました。

この点も、創価学会と類似している点です。本日のこの会場にも、男性よりも女性が多く参加されています。また昨日の私の講演会でも、参加者の約八十パーセントが女性でした。私は、本年四月に南米を訪問し、講演を行いました。そこでも聴衆のほとんどが女性でした。女性は現実に対応し、リーダーの役割を果たしていたのです。

ガンジーは、社会を変革しようと思うならば、女性を励まし、信頼し、活動の前面に立たせ、リーダーシップを取らさなければならぬと考えていました。二十世紀は男性がリードしてきましたが、二十一世紀は女性がリーダーシップをとる世紀にしたいものです。その方が、ものごとがはるかにうまく進むことでしょう。

私の家でも状況は同じです。妻と母が家庭、仕事などすべてをうまく運営してくれています。ここに座っているシスター・マイティリ氏も、財団をめぐりに運営しており、私たちラマチャンドラン博士の弟子たち

は皆、彼女を信頼しています。私の母、妻、マイティリ氏の徳は、多くの男性のそれよりもすぐれているのです。

ガンジーはそうしたことを深く理解していました。そして、池田博士も、女性のエンパワーメントに徹して関わっておられます。私はそのことをいつも称賛し、尊敬している次第です。

さて、次に、ガンジーが社会変革をどのように考えていたかについて述べたいと思います。ガンジーは、解放者としての役割を果たしました。私たちは、解放者としての役割を果たそうとするならば、まず私たち自身を解放しなければなりません。私たちは皆、偏見、憎悪、利己主義の犠牲者です。生命ほど貴重なものはありません。生命がもつとも貴重なものであるならば、生命を尊重し、守らなければなりません。解放者になるためには、私たち自身が解放されなければならないのです。

ガンジーは、その戦いを政治的な局面から開始しました。インドを支配していたイギリス人が、インドか

ら出て行くこと、インドをインド人の支配にゆだねることを望んだのです。しかし同時に、ガンジーはインド人に、イギリス人を尊敬するよう教育しました。ガンジーは言っています。「私の戦いはインド人とイギリス人を教育することにある」と。

彼は、イギリス人には、平和裡にイギリスに帰るよう教え、インド人には、ここにいるイギリス人はかわいそうな人たちであり、害を与えてはならないと教えました。そして、自身を教育し、尊敬される市民になるよう努めることを教えたのです。そうすれば、イギリス人もインドを支配しつづけるのは不可能であることに気づき、インドを去っていくだろうと。

聖書には、悪を憎んで、人を憎まないという思想があります。悪はまさに悪ですが、行為者は道具にすぎず、自分が何をやっているのかに気づいていない場合もあるのです。ですから、悪と行為者を分けて、悪を憎んでも、行為者は憎まないのです。その行為者も人間であり、究極の存在である「神」の被造物なのです。

マーティン・ルーサー・キング牧師は、ガンジーが

そのように述べたことを知った際、それこそが聖書のこの思想を最も適切に解釈した表現であると思ったと、語ったことがあります。このようにして、キング牧師はガンジーの偉大な称賛者となり、アメリカ大陸においてガンジーの戦略を採用し、その通り実践し、社会を大きく変革したのです。

現在、創価学会は、非暴力の原理を、ガンジーやキングと同様に理解し、同様の社会運動を展開しています。創価学会や仏教一般にとつて、非暴力を社会的行為の原理ととらえる解釈は、けつして新しいものではありません。非暴力（アヒンサー）は、仏教の提唱する不殺生という生命尊厳の理念に匹敵するものです。それは生命の尊厳、自然の尊厳であり、個々人が生命の尊厳にもとづいて平和的に変革をしていく考え方です。

ガンジーは、ふたたび人々を教育し始めたとき、一つのことを明確に認識していました。それは、キリスト教等において変革への最大の障壁となったのは、宗教をハイジャックした（乗っ取った）人たち、すなわち聖職者たちであったということです。インドでも同様

です。彼らは、宗教を私物化し、宗教を乗っ取り、宗教をあたかも刑務所のようなものにしてしまっているのです。

ガンジーは、宗教を聖職者たちの刑務所から解放しなければならぬと、明確に認識していました。そして、宗教を民衆による社会変革のために適切に用いなければならぬと主張しました。宗教を民衆の手に取り戻さなければならぬのです。しかし、そうした考え方を許す聖職者がいるでしょうか。一人もいないでしょう。それで、ガンジーは非常に多くの批判にさらされなければならぬでした。しかし、彼は楽天的でした。楽天的であるということは、すべての人間にとって最高の徳であります。ガンジーは戦いました。そして、最終的にガンジーは勝利を獲得したのです。

日本においても、創価学会が宗教を僧侶から解放し、民衆のための宗教に変革したことを、私は存じ上げております。私は、SGI、創価学会、そして皆様方すべてが、ガンジーと同じように勝利されることを望みます。そして、皆様方すべてが成功を手になされること

を望んでおります。

本日の日印合同シンポジウムは、ガンジー、ラマチヤンドラン博士、池田博士というきわめて偉大な人物とその偉業を理解するための、重要な第一歩であります。皆様方のますますのご活躍を、心よりお祈り申し上げます。ご静聴、大変にありがとうございます。

(N・ラダクリシュナン／マハトマ・ガンジー非暴力

開発センター議長)

(訳・くりはら としえ／東洋哲学研究所主任研究員)